

皮心伝心

皮膚科や私に対する言葉とめげない心

1982年から2つの一般病院に35年間勤務している。この間身近な方からいただいた、皮膚科や私に対する忘れられない言葉がいくつかある。

1. きびしい言葉

30年前、皮膚科外来に手伝いにきた看護副部長いわく「この先生はなー、どうでもいい病気をていねいにみてくれるいい先生だよ」

10年前、他院の院長が社保の審査の合間に「病院に産婦人科がないとやっていけないが皮膚科はなくてもいいね」

いずれも顔見知りの方の悪気のない言葉で、小生はとくに表情も変えず反論もしなかった。ふりかえってみると、このへんが世間や病院勤務者の皮膚科と私に対するそれほどはずれていない評価なのかもしれない。

ここ数年、院外からの小生あての紹介患者は年間約700人で、医師個人としては3～1番目である。これは上記のきびしい言葉の賜物かもしれない。

2. やさしい言葉

30年前、当院に来て毎月患者が減っていくのを心配していたら事務局長に「患者なんかなんぼへってもいいです。先生の好きなようにやってください」といわれほっとするとともに、皮膚のアレルギー、感染症、腫瘍・手術を強くしたいと考えた。それから30年、現状はどうであろうか。この3分野で日本の中の上ぐらいにはなっているかな。

3. はげましの言葉

35年前に勤務していた病院では、大学の先輩でもある病理部長は毎日午後4時半になると医局で酒をのみ酔っ払い、小生が医局の前を通ると「おいデルマ！ お前なんか勉強してもものにならない！ ここにきて酒をのめ！ このばかやろ」といわれ、私は走って逃げながら「そんなことはないぞ、おれはあんな医者にはならない、勉強するぞ」と心の中で思った。ただこの病理医の診断はするどく、術者の力量をプレパレートで判断する。ある病理レポートにはこう書いてあった。「お前はとれたと思っているだろうが、必ず再発する」→その後本当に再発した！ 定年後は郷里に帰られ悠々自適の生活をされており、あこがれの先生である。今考えると、私に対する一見きびしい言葉はひょっとすると本当ははげましの言葉であったのかもしれない。そんな先輩に見守られながら勉強できたので、今年の日皮総会で優秀一般演題賞をいただけたと思う。

当院で私は最近10年間病院の医学雑誌編集と褥瘡対策の委員長をしているが、基本的には普通の医師である。夕方から夜はゆったりと電子カルテでその日の新患をふりかえり、翌日の予約患者の予習ができる。定年まであと1年半であるが、地道に日ごろの診療のレベルアップに努めたい。それがこれまで多くの方々にお世話になったせめてもの恩返しになるような気がするからである。

なお、当科は1918年3月の開設でもうすぐ100年になります。100年間のご愛顧にも感謝いたします。

角田 孝彦

(山形市立病院済生館皮膚科長)